デビルサマナー　葛葉ライドウ対死霊魔術師

雨月御蔭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デビルサマナー　葛葉ライドウ対死霊魔術師

【Ｎコード】

Ｎ５４６０Ｋ

【作者名】

雨月御蔭

【あらすじ】

運の話題も遠ざかりつつある帝都。一見平和に見える街には最近、不可解な事件が多発していた。大量に盗まれる土、謎の地震、夜な夜な聴こえてくる泣き声。その謎を探るべく、若干１０代にしてデビルサマナーを務める１４代目・葛葉ライドウの元に、再び帝都守護の任が下る。デビルサマナー・葛葉ライドウ、完全オリジナルストーリー。

序章　或る男の手記（前書き）

作品の都合上、若干の残酷描写が入ります。ご了承の程を。
時間軸はアバドン王の少し後ぐらいです。
拙い文章ですが、お楽しみいただけたら幸いです。

序章　或る男の手記

１９ＸＸ年、葉月の頃。
帝都の某所にて、一人の男が死んだ。

彼に友と呼べる者は居らず、家族はとうに死に別れ。
自宅の床に静かに横たわり、彼は只、孤独に死を迎えた。

凶器の無い事から事件性は否定され、かと言って自殺でも無い事から、自然死であろうという結論に至った。
しかし彼の真の死の理由は、誰一人として知る者は無い。

死の寸前まで書かれていた、彼の日記の最期には、震える字でこう遺されている。

「私は一人だが、決して孤独では無い。
私は死して初めて、彼等の仲間と成るのだ」

此の言葉の意味を解せる者は、未だ誰一人として現れて居ない。

――『帝都に住まう或る探偵の手記』より

第壱話　怪事件

矢来区筑土町。
帝都北西部に位置するこの街は、モダンなビルヂングに見下ろされながらも、平和会館や多聞天神社等と云った建物が並ぶ。
萬年町のような派手さや深川町のような古めかしさは無くとも、十二分に賑わいがある場所だ。
郵便局や洋品店、文房具店に骨董屋、更に洋食亭や豆腐屋まである為、他の町から訪れる者も多い。
此処に住んでいる限りは、生活に困ることは到底無いと云っても良いだろう。

さて、丑込め返り橋を渡り、平和会館を右に見ながら、富士子パーラーの手前を右折する。
そのまま直進すれば金王屋なる胡散臭い店が左に現れ、その奥を左折すると軽子川商店街に入る。人々の賑わう商店街は、氷売りや時に捜査中の警察まで立っていることがある。それだけ、人の交流が盛んなのだ。
赤いポストが目印の筑土町郵便局を過ぎた辺りで、一際目立つビルヂングが聳え立つのが眼に映るだろう。
――銀楼閣。
白い壁にモダンな造り。やや古風な周りと比べ、ハイカラなその存在はやや浮いて見える。筑土町最大のビルヂングたる此処は、屋上から帝都が一望できそうな高さだ。
オカルト専門の一風変わった探偵社――鳴海探偵社は、その弐階に存在している。

「――“沈黙は金、雄弁は銀”って言葉があるだろ？」
落ち着いた室内には常に、鳴海の選ぶレコードが掛けられている。無論、無駄な事では無い。それによって客を来易くするのが目的だ。
選曲は勿論いつもと同じ、お気に入りのモダン・メロディ。
「あれってさ、銀の方が高価だった頃の言葉なんだとよ。だから実は雄弁な方が良いって意味らしいぜ」
書類で散らかった机。ダイアル式の卓上電話は、今日一日は鳴りそうにないだろう。新聞を開けば見慣れた文字列が並ぶ。そろそろこの記事にも飽きてきた頃だが、他に見るものも無いのだからしょうがない。
はあ、と一息吐いて、視界の隅に映った溜息の元凶を恨めしく睨む。何だってこんな良い天気なのに、この独特の陰鬱な空気に包まれねばならないのだ。
飽きている。メロディ以外に耳に響くものが無い。何か音が欲しい。例えば、そう、人の声だとか。
「……だからさぁ、何か喋ろうぜ？　ライドウ……」
名を呼ばれた書生が顔を上げる。彼は只の書生では無い。若きデビルサマナー、葛葉ライドウだ。
整った顔立ちをした少年だ。黒い学生服は弓月の君高等師範学校の印章が付いており、同色の学帽からは独特の尖った揉上げが覗いている。
灰色がかった瞳が、鳴海の濃茶の瞳に合わせられた。何故睨むのですか、と云わんばかりに。
「――何か、と云いますと」
薄い唇が開く。同年代の少年と比べて低めの声が、鳴海の鼓膜を打った。彼はあまり、自ら喋ろうとしない。こうして定期的に声を掛けねば話さないので、時折死んでしまったのかと冷や冷やする事もあった。

今だってずっと下を向いてぼそぼそやっていたから、てっきり昼寝の体勢に入ってしまったのかと思っていたのに。起きていたなら話しかけてくれ！　鳴海はそう叫びたかった。

其れがこの少年には通用しない事ぐらい知ってはいるが、それでも期待せざるを得ないのだ。此処にいるのは自分と彼だけ、話せる人は其れしかいないのだから。

「何かって、そりゃ何かだろ。ほら、そこらのおばちゃんが話してるような世間話っての？　ああ云うので良いんだよ、適当に時間が潰せるだけの」

「――時間の浪費です」

「だぁから、時間を潰す為だって言ってるだろ？　難しく考えるなよ、ライドウ。ああでもなるべく楽しい話題が良いかな、近頃暗い話題ばっかりで気が滅入っちまう。まぁできれば恋の話題、誰かの失敗談を面白おかしくってのも良いな、それから――」

『……よく一人でそこまで喋れるものだ』

鳴海の声を聞き流しながら、ライドウは足元を見遣った。小さな黒猫がちょこんと座っている。先程の声は、この黒猫のものだった。

業斗童子。それが此の猫の名だ。彼は元は人間、ライドウと同じデビルサマナーであったが、禁忌を犯して魂だけの存在と成った。今は黒猫に宿り、ライドウの目付役を担っている。

彼の声はデビルサマナーにしか認識できない。鳴海含む一般人には、只の鳴き声に聴こえるだけだ。

「――彼も暇なのだろう、仕方ない」

『あれでヤタガラスの一員だと云うから、呆れるな』

“ヤタガラス”とは超國家機関の名称、太古よりこの国を支配し、各時代の霊能者を操ってきた裏組織だ。国家の治安を維持することに尽力しているように見えるが、機関の実態や真の目的は、未だ謎に包まれている。

鳴海はその一員であり、葛葉一族たるライドウもまた、その傘下に置かれていた。

古き平安の頃より、人々は鬼や妖の類に悩まされていた。
呪術によって人を死に至らしめていた時代。都に現れる妖は時に人を襲い、喰らい、いつしか怖れられるように成っていった。
そんな中、妖を祓う云わば“救世主”とも呼ぶべき存在が現れた。安倍晴明を始めとする、陰陽師である。
彼等は“式”と呼ばれる妖を用い、呪を撥ね返し、人々の安全を護った。
しかし後の世、彼等は明治政府によって“信憑性が無い”と烙印を押されてしまう。その結果として陰陽師は居場所を失い、人々の記憶からも消えて行ったのである。

だが、幕末の混乱から明治維新にかけての時代変遷の激変により、或る者は時代に呼応して富を貪り、或る者は古き時代に固執するが故、鬱屈とした生活を送るようになる。
そして生じた人の情念――妬み、僻み、金銭欲――で、帝都は様々な怪異の生じる魔都と化しつつあった。

其の混乱を食い止めんとするのが、ライドウら悪魔召喚師（デビルサマナー）だ。

時は遡り平安より以前、日本古来の神道や大陸より伝播した陰陽道に通じ、強大な力によって悪魔を使役した一人の男が、同様に強大な力を持つ４人の悪魔召喚師を率い、ある一族を興した。
それが葛葉一族である。
葛葉一族は隠れ里にて悪魔召喚の秘術を継承し、そして今の世に生き続けている。
此の一族に於いて、宗家以外の４つの家名は以て葛葉四天王と呼ぶ。無論、ライドウ、ゲイリンと云った始祖の名は、強い実力を持った後継者しか襲名することは許されない。

そして“此の”ライドウはその若き１４代目であった。

『む？　……暁よ、使役していた仲魔が帰って来たようだな』

業斗童子――ゴウトはライドウを本名で呼ぶ。襲名する際に捨てた真の名は、蒼桜院（そうおういん）　暁（きょう）と云った。

鳴海の向こう側、輝く硝子窓の向こうに、羽根の生えた少女が浮かんでいた。とんとん、と窓を叩き、伝えたい事があると云わんばかりに此方を見ている。

「？　何だよライドウ、俺のハンサムな顔に何か付いてる？」

鳴海は振り向いて、硝子窓に顔を映した。いつも通りの良い男だ。視界も良好。磨き抜かれた硝子は時に、鏡としても使えるのが好ましい。

見つめられるのは悪くないが、それなら可愛い女の子が良い。例えば料亭・竜宮の琴音ちゃんとか、ミルクホールの雫ちゃんとか。それから他に――

「――鳴海さん、少し外に出ます」

其の甘い幻想を打ち破るかのように、ライドウの声が耳に届いた。

鳴海が事態を把握する前に、彼は掛けてあった長外套を羽織り、足早に扉に向かっていく。漸く呑み込めた頃には、ライドウは開いた扉の間に滑り込んでいた。

――結局俺が一人で喋ってただけかよ！

扉の向こうに消えようとするその背に向かって鳴海は叫んだ。

「ああもう何なんだよ！　良いかライドウ、外に行くなら今度は話題持って来いよ、絶対だぞ！」

扉の閉まる音が、鳴海の声を掻き消した。

『もう！　人間ったらおっそ～い！』
腰に手を当てながら、少女が不平を漏らす。桃色の髪に赤い帽子、同色の着物を見につけている。一見すれば只の異人の少女だが、その背からは鳥のような羽根が一対生えていた。
疾風属――つまり風を司る悪魔、名をモー・ショボー。
彼女はライドウの使役する仲魔の一人だ。その管属の通り、風を利用した攻撃を得意とする。また回復術にも優れ、ライドウにとってなくてはならない存在であった。
「――すまない、次はもっと早くする」
『今度また気づいてくれなかったら、ころしちゃうからねっ』
「――勘弁してくれ」
物騒な事を口にする者が多いのも道理。彼等は悪魔なのだ。慣れない頃は苦労したものだが、今は漸く、そういうものなのだと思えるようになった。
――悪魔との会話は未だに苦手だが。
「――モー・ショボー、偵察はどうだった」
『えっとねぇ……あ！　あのねぇ、面白い事云ってたの、聞いて聞いて！』
ライドウは時折こうして仲魔に単独捜査を行わせる。人の身には入れぬ場所、聞けない情報などを調べるのに、仲魔の存在は必要不可欠なものだ。
無論、此の遣り取りは誰にも知られることは無い。彼女が悪魔であり、ライドウがデビルサマナーだからこそ、こうして対話が出来る。
『ヘンな地震が起きてるんだって、フカガワの方で！　しかも何日もだよ』
「――地震？」
『……地震と云うと、アバドン王事件を思い出すな』
ゴウトが呟く。アバドン王事件――つい先日まで帝都を騒がせていた、大事件だ。

世が不運に飲み込まれるという未曾有の大惨事。その発生を防いだのは、他でもないライドウであった。
しかし代償は大きく、其れによって街は崩壊し、数多の死傷者を出した。其の傷が漸く癒えてきた此の時期に、またも大きな禍が迫っているとでも云うのだろうか。
「――実感が無いな」
『あたしが聞いたのはそれだけだよ、これでいい？』
「――ああ。すまなかったな、ご苦労だった」
『えへへっ。じゃあまた遊んでね！』
ライドウが取り出した銀の管が緑色に輝く。それと同時に彼女の身体が発光し、一瞬の後に彼女の姿が掻き消えた。
悪魔を使役する為の“管”。ヤタガラスによって支給される其れには封魔の術が施してあり、悪魔を自由に召喚、帰還させることが出来る。デビルサマナーの必需品であった。
『……暁よ』
「――何だ」
『次は、会話をする場所を考えた方が良いかも知れん』
云われて辺りを見渡すと、数人が立ち止まって此方を見ていた。近くを微笑しつつ通り過ぎる者もいる。
――忘れていた。此処は往来だ。異界で悪魔と会話するのとは、訳が違う。
「――……」
誤魔化すように帽子を深く被り、咳払いをする。次第に一人、二人と見物客が居なくなった。
『デビルサマナーたるもの、目立つ行動は控えねばならぬからな』
「――以後、気を付ける」
少なくとも往来の激しい場所では、人目を気にしなくてはならない。葛葉の里では悪魔との会話も普通に出来たが、此処はあの隠れ里では無い。一般人が住む街、帝都なのだから。
「――どうする、ゴウト」

『ふむ……聞き込みをしたい所だが、未だ情報が少なすぎる。ひとまず戻るか、丁度良い話題も手に入った所だ』
「――ああ。明るい話題では無いが」
『構わんだろう、仕事の話題だ。奴も喜ぶぞ』
「――そうだな」
仕事の話題で、鳴海が良い顔をする訳が無い。ゴウトはそれを皮肉ったのだろう。
未だ冷たい風。じきに春の嵐が来る。ライドウは今一度、学帽を被り直した。

「……そうなんだよ、結局俺が一人で話してたんだぜ？　もう話題の一つも提供してくんなきゃ……ああ」
鳴海は手を軽く上げた。ちょっと待て、という合図。電話中だったらしい。
「ごめん、帰って来たみたいだ……うん解った、じゃあそういうことで……またね、タヱちゃん」
チン、と受話器が置かれる軽快な音。椅子を此方に向け、鳴海は何か言いたげにライドウを見た。
明らかに期待の籠った視線。ゴウトが不機嫌そうな声を漏らす。目を逸らさず、ライドウは口を開いた。
「――話題を持って来ました」
「お！　解ってるじゃんライドウ、やっと俺に気を遣ってくれるようになったんだな？」
『うぬが持って来いと云ったのだろうに……』
隣でゴウトが溜息を吐く。ライドウは続けた。
「――明るくなくて申し訳無いのですが」
「……まあ良いか。続けて」

「――深川の、地震の事です。ご存じですか」
「深川……？」
鳴海は怪訝そうな顔を浮かべた。先程の電話の内容を思い出す。
怪事件。あれも、確か――
「ライドウ。さっきの電話、タヱちゃんからなんだけどさ……彼女も、深川がどうこうって云ってた」
「――タヱさんも？」
朝倉タヱ。帝都新報の敏腕女性記者だ。
民俗学のノンフィクション作家を目指す彼女は、あくまで“民俗学的に”怪奇現象を調べており、その為に度々此の鳴海探偵社を訪れる。
鳴海、ライドウ共に、彼女とは親しい間柄だ。その彼女が云ったのだから、間違いは無いのだろう。
彼女の情報収集に向ける情熱は、他の比では無い。
「ああ……何でも、土が盗まれるらしいんだよ」
「――土、ですか」
『土が？　どうしてまた』
鳴海が説明するには、こう云う事だった。
宝石や貴重品など、金銭的な何かならまだ解る。しかしその犯人は、土を盗む。
しかも、ごっそりと。畑や道端、果ては墓場の土まで、とにかく土を掘っていくのだそうだ。
「佐竹さんとかにも聞いたんだけどさぁ、土が金になるなんて聞いた事無いって」
参ったよ、と鳴海は頭を抱える。ライドウはちらりとゴウトを見遣った。
ゴウトは軽く頷き、首輪から小さな手帳を取り出すと、筆を咥え、何事かさらさらと書き込んだ。
「――鳴海さん、情報を集めてきます」
「ん、解った。疲れたら帰って来いよ。頼りにしてるからな！」

不意に鳴海の顔が明るくなる。反対に、ゴウトの顔は暗くなった。
此処にいる限り、情報収集は主にライドウの仕事だ。
鳴海はいつ仕事をしているのか解らない。麻雀や優雅な食事に勤しんでいるらしい、という噂もある。
つまり、面倒事は全てライドウに任せる――という魂胆らしい。
そんな彼でも、たまには役に立つからこそ、探偵を続けられる。
無論あくまで、ごくたまに、だが。
『自分で行けば良いものを……まったく、調子の良い奴よ』
疲れたような声で呻き、ゴウトは歩き始めたライドウの後を追いかけた。

第壱話　怪事件（後書き）

ようやく第壱話終了。此処まで読んでくれた方、ありがとうございました。

４／３　助言通りに加筆修正。心情って難しい。

第参話　事件、女、子供

「此処に、貴方の御子が居るのです」

嗚呼――

許してくれ、我が最愛の人よ。

願えども、願えども――此の悲しみは、癒える事を知らない。

帝都北部、矢来区筑土町より電車に揺られて拾分ほど。

筑土町から数えてふたつめの駅で降りれば、深川町は目の前だ。

千寿区深川町。筑土町と比べ、まだ古き良き頃の面影を色濃く残した街だ。

ハイカラなビルヂングが無い代わりに民家は長屋が多い。また見世物小屋が有るのも此の街だけだ。

住む人々は穏やかながらも活気を忘れてはいない。筑土町には無い魅力を持つ、どこか懐かしさすら感じる街――それが此処、深川町であった。

「ねぇそこの君、ちょっと良いかな？」

呼ばれて振り向くと、そこには一人の女が立っていた。

ライドウよりやや小さめの背。黒い髪は短めに切り揃えられ、どこか少年のような風貌を醸し出している。だが見に纏った桃色を基調とした服装はモダン・ガールそのものだ。

肩からは茶色の鞄が斜めに掛けられ、首にはカメラを提げている。見たところ、女は新聞記者のようであった。

「――何か」
「あのね、場所を教えて欲しいんだけど」
そう言うと女は胸のポケットから小さな手帳を取り出し、ぱらぱらと頁を捲った。大分使い込んでいるのだろう、其の表紙は擦り切れてぼろぼろになっている。
数秒の後、あ、あったあった、と小声で呟き、彼女は顔を再びライドウに向けた。
「えっと……大國湯ってどこに有るのかな？」
一瞬、周りの時が止まったのに女は気付かない。ライドウは頭を捻り、次の言葉を絞り出した。
「――大國湯、ですか」
「そうなの、ずっと歩いてるんだけど見つからなくて……困っちゃう」
本当に困っているのだ、という顔をする彼女を脇目に、ライドウとゴウトの目が合う。
どうやら、互いに感じた事は一緒らしい。
ゴウトは呆れた様に一声鳴き、ついとそっぽを向いた。
「あ、君も分からないかな？　ごめんね、時間が無いなら他の人に」
「――目の前です」
「……えっ？」
「――ですから、其処です」
ライドウが指差したのは、話している位置から拾数歩程しか離れていない場所。
鎮座する木製の建物の入口には、大きく『大國湯』と書かれていた。
「……」
女はぽかんと口を開けて其処を見つめていたが、不意に力が抜けた様にその場に崩れ落ちた。
そして、ああ、と明らかに落胆した声を上げる。
――ああもうまたやってしまった、あたしとした事が何てこと！

これじゃあの人みたいになれないわ……！　でもしょうがないの、此の場所が解らなかったのも無理は無いわ。だって深川町なんて初めてで、それにもっと重要な理由が有るんだもの――！

どうやら独り言のつもりなのだろうが、傍らに立つライドウには全て聞こえていた。

「――あの」

「あうぅ～……ふぇ？」

女が顔を上げる。ライドウはそっと手を差し出した。

「――膝が汚れます、さあ」

「え、あ、あ、良いのよ別にあたし、だって」

「――間違いは誰にでも有る事です」

「……」

諭すように言ったのが通じたか、女は黙ってライドウの手を取った。ヒールの高い足首を捻らない様注意しながら、ライドウは女が立つのを手伝う。

漸く落ち着いた――かと思いきや、彼女の様子がどこかおかしい。

「――大丈夫ですか」

「へっ！？　あ、あたしは大丈夫よ！」

『どう見ても大丈夫では無さそうだが……』

ゴウトの云う通り、女はどこかおかしかった。

やたらと無意味な事を喋り、目はライドウから逸らされ、更に顔が赤く染まっている。

大丈夫だろうか、という思いが表情に出たか、はっとしたように女が此方を見た。

「し、心配しなくて良いのよ、大丈夫だから！　教えてくれてありがとう助かったわ！」

「――そうですか」

「え、ええ！　もう君はあたしの命の恩人よ、何て感謝したら良いかしら」

「――では、自分は所用が有るので」

「いっそ一緒に……え？」
「――失礼します」
一礼し、女に背を向ける。ライドウは大國湯に――正しくは其の中に居る人に、用が有った。
彼の協力無くては、捜査が滞る場合が有るのだ。
女は其処に突っ立ったままの様だった。じきに正気に戻ってどこかに行くだろう、とライドウは思い、足を進める。
『暁よ』
「――何だ」
『……うぬも罪よのう』
「――？」
云わんとする事が分からず首を傾げる。
暖簾を潜る瞬間、後ろで女の叫び声が聞こえた気がした。

「もう少しだ……」
射干玉の闇の中、男が嗤う。
彼は目の前の硝子ケヱスを愛しげに撫でた。恋人に触れるが如く繊細に。
「もうすぐ――全てが始まる……」
硝子ケヱスに顔を近付け、其処に耳が有るかのように彼は囁いた。
其の儘身体の輪郭をなぞるかの如く、指先をケヱスに滑らせる。そして中程、人で云うなら丁度腹の辺りで指を止め、其処に頬を寄せた。
「君は其の時、女神と成るんだ……私だけの、虹の女神にね――」
ケヱスの中には、白い白い、人間の骨が並んでいた。

『上手く進んだようで良かったな』
「――ああ」
大國湯の暖簾を潜りながら、ライドウは詰めていた息を吐いた。
風呂上がりで未だ身体が火照っていたのもあるが、何より、話が上手く纏まった事への安堵感が勝っている。
「――安心した。彼は信用に足る人だ」
『うむ。コネは多く作っておけ、と云うのも強ち間違いでは無いのかも知れぬ』
彼とは佐竹健三――此の一帯を纏め上げる、関東羽黒組の若頭だ。鳴海や自分とは顔見知りで、度々有益な情報を与えてくれる。
其の情報には確実性があり、彼の指揮する関東羽黒組の子分たちが集めてくるだけに、表では流されない裏の情報も多い。
何より、古き良き任侠の道を護らんとする彼の姿勢は、他者から見ても好ましいものだ。其れ故に舎弟らを含む支持者は多く、街の者達からも好感を得ている。
だからこそ鳴海もライドウも、佐竹と云う男を信頼しているのであった。
「――彼の機嫌が良くて、助かった」
『だな……“ツイている”とでも云っておこう』
今日は近日の怪事件について知っているか否かを聞くと同時に、捜査の手伝いを依頼しに来たのだ。大抵なら解ってくれるのだが、それでも時折虫の居場所が悪い事もある。其れを心配していたのだが、どうやら杞憂で済んだようだ。
佐竹にとっても、今回の事件は気になっていたらしい。彼はもう独自に捜査を始めており、既に入っていた情報を提供してくれた。
深川近辺の怪地震、土の盗難。今の所はこんなものだろう。ライドウは探偵手帳を閉じ、ゴウトの首輪に挟んだ。
と――

「――おや」
『む、どうした』
「――あれは」
ライドウの視線の先、二人の人間が言い争っている。
ごく普通の町娘と、まだ五つ程の子供だ。
『姉弟喧嘩では無いのか？』
「――其れにしては、様子がおかしい」
周囲の人々も気になるのだろう、通り過ぎ様に二人を横目に見ている。
おかしい、と云うのは二人の見た目では無い。其の会話の、内容であった。
「……解ってんだぞ！　隠したって無駄なんだからな！」
「誤解です、私は何も……」
「人を惑わすアヤカシめ！　成敗してやる！」
遠巻きに聞こえる会話。言葉の節々に宿る単語が、其の異様さを物語る。
ライドウはゴウトと顔を見合わせた。只の会話では、無い。
「――少し、見てくる」
『……まあ、困っている女子を助けるのは男として当然の務めだな。構わぬだろう』
ゴウトの呟きに答えず、ライドウは足を進めた。

「――少し、構わないか」
「誰だよあんた、俺の邪魔すんな！」
「――否。少し、聞きたい事がある」
二人が問答している間に、ゴウトは相手の顔をしげしげと眺めた。
近寄って見ても、其処らに居る様な平凡な子供にしか見えない。
着物も顔立ちも、何処にも異常な所は見受けられない。
だが――彼の身から発せられる“其れ”だけは、常軌を逸してい

た。
『（――此奴、マグネタイトの量が尋常で無いぞ！？）』
マグネタイト――緑色に発光する其の物質は、ライドウらデビルサマナーが悪魔を召喚・使役する際に使用する、謂わば生命エネルギーの様なものだ。
悪魔はサマナーの命に従い、其の代価としてサマナーのマグネタイト（以下、ＭＡＧと略す）を喰らう。ギブアンドテイクの取引の上に、彼等の関係は成り立っている。
が、通常の人間であれば其れを使いこなす事は到底不可能であり、また持つ量も限られてくる。
つまり――
『暁よ、此の小童、只者では』
無いぞ、と云おうとした瞬間、今までライドウと話していた少年が、驚愕の浮かんだ顔をゴウトの方に向けた。
「なっ……何だよ此の猫、喋るのか！？」
「――！」
『んな！？』
其の言葉に、ライドウの顔に動揺が走った。在り得ない事が起こっている。
此の様な事は今までに数回あったが、相手が同じデビルサマナーであったからこそ起き得た事実。一般の人間に当て嵌まる例など何処にも無い。
『（馬鹿な！　我が声は同じデビルサマナーにしか聞こえぬ筈……！　此の小童、何者なのだ！？）』
サマナーにしか聞き取れない声を聞き、通常より多くのＭＡＧを所持する少年。
背筋が凍るような感覚を覚えた。正体が、解らない。
少年は硬直する二人を見ていたが、不意に納得したような顔に変わった。
「……そうか、あんたたちもそいつの仲間なんだな！？」

「――っ、」
違う、と言い返す前に、少年は自らの手を懐に入れた。ごそごそと何かを探している様に動いていた手が、目当ての物を見つけたのか、ぐいと引き出される。
「決めたぞ、皆揃っておれが裁いてやる！　帝都の平和を乱す奴は、おれが――」
「やめて、れいちゃん！」
彼が手を全て引き出すか引き出さないかの内に、甲高い声で制止が入った。
声の主が駆け寄り、ライドウと少年の間に割って入る。
「……ちい！　来るなって言っただろ！」
「だってだって、れいちゃんが心配だったんだもん……！」
「馬鹿っ！　お前が外出たってお父さんに知れてみろ、怒られるのはおまえなんだぞ！」
ちい、と呼ばれたのは、赤い着物に黒い髪の少女だ。年の瀬は少年と同じくらいだろう。
名を呼んでいたからには知り合いに違いないが、兄妹にしては顔が似ていない。幼馴染、と云った所か。
外出してはいけない、と云われたにも拘わらず、心配で此の少年を追って来たのだろう。病気でも持っているのだろうか。顔色を見る限り、そうは見えないのだが――
「れいちゃん、これ以上ここにいちゃ駄目、早く帰ろう」
「ちい……！」
少女はそう言いながら少年の袖を引いた。其の途端、少年が懐に入れていた手が抜け、同時にはらはらと何かが零れ落ちる。
短冊形の紙片。書かれた筆文字。独特の模様の縁取り。
――札だ。
だが其れをライドウが拾い上げるより早く、少年は其れを掠め取った。乱暴に其れらを仕舞い込むと、此方を強く睨みつける。
「今日は此処で退散するけどな、あんたたちが何かしようもんなら

容赦しないからな！　覚えとけよ！」
其れだけ言うと彼は振り向き、少女の手を引いて足早に去って行った。
取り残されたライドウは軽く息を吐き、後ろに立ち尽くす町娘の方を振り向いた。
「――行ってしまいましたが」
「はい……有難う御座いました」
未だ落ち着かないのか、胸に手を当てている。ライドウは近寄ると、背をそっと撫でた。
「私はもう大丈夫です……其れでは、失礼致します」
「――気を付けて」
「はい」
深々と頭を下げ、彼女は少年が去ったのとは反対の、大國橋の方へと歩いて行った。
一拍遅れてゴウトが深く息を吐く。やれやれと首を横に振り、ライドウを見上げた。
『災難であったな、暁よ』
「――ああ」
『然しうぬも矢張り人の子、女子には寛大……待て、うぬ、何を持っておる？』
異変に気付いたゴウトが問うと、ライドウは握っていた手を開いてゴウトに見せた。
小さな紙片。流麗な字で、『空き地にて、お待ちして居ります』と書かれている。
『まさか、その、此れは』
「――外套に挟んであった」
『なぁ……っ！？』
つまり其れは、町娘が去り際に挟んで行ったと云う事で。
女子が男子に、人気の少ない所で待って居るという。其れが意味するのは――

『き、暁よ、女子を待たせてはならぬぞ』
「――解っている」
『し、しかし其の、見かけによらず随分と大胆なのだな、あの女子は』
「――……」
――ええい、羨ましい奴よ！
歩き続けるライドウを横目に、ゴウトは胸の裡でそう叫んだ。

第参話　事件、女、子供（後書き）

長くなったので分けます。

第肆話　浮かび上がる謎（前書き）

※この話から戦闘描写が入ります。気持ち悪いのが駄目な人は注意。

第肆話　浮かび上がる謎

深川町には開けた場所が多く存在する。筑土町ほど人口が多くないこの町では、家を多く建てる必要性が無いからだ。
また、外から越してきた者たちは大体が銀座町や筑土町に集中する為、家を増やす必要に追われず、必然的に数代前から暮らす人々が集う。
住人同士の結束力が強いのも、此の町の長所であった。

「――此処か」
『うむ、深川町で空き地と云えば此処であろうな』
深川町の南、川沿いの場所に、一際大きな空き地がある。何も無い、草の生えているだけの場所だが、近所の子供たちの遊び場となっているらしい。空き地の隅の草叢に、薄汚れた鞠が一つ転がっていた。
彼女が云っていたのは此処であろうと検討を付けたのだが、人の気配は感じられない。
『……おや、今日はあの犬が居らぬようだ』
「――アントワーヌが？」
空き地の隅、いつも何かを待つように座っている小さな犬。とてもハイカラな名前だが、誰が付けたのかはライドウも勿論ゴウトも知らない。
来る度に尻尾を振って喜び、ゴウトにじゃれついてくる彼女が、どうやら今日は居ないらしかった。
「――残念だったな、ゴウト」
『残念ではないわ馬鹿者！　いつも涎塗れになる我の気持ちを考えろ！』
「あの……」

おずおずと掛けられた声に、二人は口論を止めて振り向いた。
間違いない。先程、子供に絡まれていた女だ。
「先程は本当に、有難う御座いました。どうも子供の相手は大変で……」
「――気にするな。其れよりも、報告を」
『報告だと？』
突如、ライドウの口を飛び出した単語に、ゴウトは目を瞬かせる。
報告？
『暁よ、もしかしてうぬ、其の女子と知り合い――』

『　ろ　てや　』

「――――！」
冷えた空気が頬を掠め、ライドウとゴウトは同時に硬直した。
刀の柄に手を掛ける。周囲の空気を震わせるように、刀が振動している。――間違いなく、何かが“居る”。
『今の声は――』
「――後ろだ、ゴウト！」
耳を劈くような叫びが響き渡る。ライドウは女を右方向に突き飛ばし、其の反動で左側に転がった。一瞬遅れて、今まで女の居た場所に方形の陣が発生し、黒紫の光を放つ。
呪殺魔法――喰らったら一瞬にして体力を削られる所だった。
体勢を立て直しながらライドウが振り向くと、暗緑色の人型がゆらりと立ち上がっていた。
『……グールか！？』
人の形こそしているが、其の外見はどう見ても生きる者の其れではない。暗緑色の肌、肋骨の浮かび上がる胴体、痩身に走る白色の血管と同色に鈍く輝く両眼が、其の姿を屍人（グール）の名に相応しい不気味

な物にしていた。
動揺したのはゴウトも、そしてライドウも同じだった。悪魔が生じるのは異界である筈、何故人の世に奴等が居るのか――？
三体のグールは左右にゆらゆらと揺れながら、光る双眸で絶えず此方を窺っている。まるで選り好みをする人間のように、其の眼に遠慮は無い。
ライドウは震え続ける刀の柄を強く握り締めた。そして抜き放とうとした其の瞬間――不意に一体のグールが口を開き、咆哮を上げた。

――オオオオオオオオオオオン！

鼓膜に叩き付けるような大音量に、一瞬ライドウの手に迷いが走る。其の隙を敵は見逃さなかった。
ライドウから離れた場所に立ち尽くす女に、三体が総攻撃を仕掛けたのだ。
『危ない！』
咄嗟に銃に手を伸ばすも、参体全員を撃ち抜くには時間が足りない。斬りかかろうにも此の距離では刀身が届かないだろう。
女の身が裂かれ、赤い血が飛び散る瞬間をゴウトは想像し、総毛立った。ライドウは動かない。
『暁――！』
何をしている、とゴウトが云うより先に、ライドウの声が空気を裂いた。

「――解除！」

ライドウが叫ぶと同時に、女の身体が緑の光に包まれる。何処か温かみを帯びた、例えるならば若草のような色――
そして其の瞬間、女の正面に居たグールの背から、長い槍が突き

出していた。
『御意！』
槍がグールを突き刺したままで横に薙がれ、他の二体の身体が吹き飛ぶ。グール達は地に叩き付けられ、潰れた蛙のような声を上げた。其の衝撃で、今まで槍に貫かれていたグールが、ＭＡＧを放出しながら消滅する。
女を覆っていた緑の光が消え去ると、其処に立っていたのは先程までの女では無かった。
若い男だ。翠色の甲冑に長い銀髪、手に握られた長槍。其の姿はさながら、西欧の騎士を思わせる。
「――久しいな、タム・リン」
『再び共に往ける事を嬉しく思います、我が主』
『何と、うぬであったか……！』
ゴウトの中の疑問が繋がった。あれは彼が“擬態”した姿であったのだ。
悪魔の中には、自身が他の物に変化する、或いは他者を変化させる事を得意とする者が居る。ライドウらデビルサマナーは、彼等を「技芸属」という管属に分類していた。
そして彼もまた、その「技芸属」の悪魔である。
『偵察に出ていた折、あのような事が……子供は想定外であったものので、助かりました』
云いながら彼は流れるような動作で、槍にこびり付いたグールの体液を振り払った。紫が辺りに飛び散り、土に吸い込まれていく。
一見隙があるように見えるが、そんな事は無い。彼は常に周囲に注意を張り巡らせている。もし今この一瞬、グールのどれかが彼に襲い掛かろうものなら、たちまち其の槍に身体を貫かれてしまうだろう。
彼――タム・リンと呼ばれた悪魔――は二人に軽く微笑みかけると、漸く立ち上がり始めたグールに再び向き直った。青い瞳が細められ、其の顔から笑みが消える。

『主、――ご命令を』
頷くと、ライドウは短く言い放った。
「――抹消するぞ」
『――御心の侭に！』
タム・リンが詠唱を開始するのと、ライドウが駆け出すのはほぼ同時だった。受身の姿勢を取ろうとするグールに斬りかかり、防ごうとした腕を切り裂く。切断面から紫色の体液が噴き出し、ライドウの頬を濡らした。
其の儘振り抜いた刃を返すように下から切り上げる。グールが後ろに反り返った為に其の刃は皮膚を裂いただけに留まったが、傷は思いのほか深く、腹部から腐ったような色をした腸が飛び出した。
正確な太刀筋は里に居た頃からの武器だった。
その背後で、タム・リンは詠唱を続けている。彼の周囲に風が吸い寄せられ、手元に集束していく。一箇所に固められた空気は真空と化し、一陣の烈風となった。
『真空刃！』
詠唱を終えたタム・リンの声が凛と響き渡り、衝撃波が残った一体のグールに襲い掛かる。哀れな犠牲は其れを全身に受け、悲鳴を上げる暇も無くずたずたに引き裂かれ、細かな肉片と成った。
――ウオオオオオオオン、
響くのは嘆きの叫び声だ。自らの死を悟り、怖れるのは悪魔も同じなのかも知れない。ライドウは振り上げられたもう一方の手を躱し、グールの胸元に飛び込んだ。
「――諦めろ」
瞬間、グールの首が胴体を離れて舞い上がり、中枢を失った躯がどう、と崩れ落ちた。
激しく緑に発光しながら、二体がほぼ同時に消滅する。終わりを見届けた後、ライドウは刀を振り払い、鞘に収めた。

第肆話　浮かび上がる謎（後書き）

まだ続きます。漸く戦闘シーン。お待たせｆｏｒ自分。

ちなみに拙宅のタムはマカカジャ、衝撃魔法持ち。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5460k/

デビルサマナー　葛葉ライドウ対死霊魔術師

2010年10月14日16時33分発行